

編集後記

陽春の候 with コロナの新時代へと移り行く中、皆様いかがお過ごしでしょうか。編集委員会 事務局の尽力の下、2023年4月1日、7本の論文を掲載した第14巻1号を発行することができました。

まず、4つの原著論文を紹介します。中山論文では、DTSaM が手関節拘縮出現の予防や早期に可動域改善に効果的であることを明らかにしています。大歳論文では、ASD の幼児の両親や保護者が家庭や学校内で起こりうる感覚の偏りについて専門家から情報を得ることは有益であることを主張しています。加賀山論文では、歩行能力・排便コントロールが老健施設からの在宅復帰に関連することを明らかにしています。鈴木論文では、低頻度外来呼吸リハビリテーションが、COPD 増悪までの期間を延長させる可能性を示しており、どれも興味深いオリジナリティーのある研究論文となっています。

ついで、3つの報告・資料・その他論文を紹介します。米津論文では、スマートフォンを用いた測定方法は膝関節伸展に対する可動域をより正確に記録できることを示唆する予備的研究報告です。福井論文は、教育用に試作した模擬電動義手の機能と構造を紹介するとともに、試用による効果と今後の課題を検討した資料論文です。坂本論文は、文献検索により、Wii®リハによる脳腫瘍患者への影響を検討したスコーピングレビューです。いずれの論文も保健医療学雑誌に相応しい興味深い論文です。

私事ですが、2013年4月1日より10年間勤めた編集委員会 委員長を2023年3月末日をもって退任しました。委員長在任中の10年間（第4巻から第13巻）には、141編の論文を保健医療学雑誌・Journal of Allied Health Sciences で掲載・公開することができました。本雑誌を投稿先を選んで頂きました著者、建設的な査読を頂きました査読者の先生方、本雑誌を引用して頂きました読者の皆様ほか、関係各位に深謝申し上げます。本雑誌も定期的発刊を継続することでき、学会機関誌としての知名度も向上してきたと自負していますが、科学雑誌としてのさらなる飛躍を目指す必要があります。

皆様からの論文投稿を随時お待ちしております。今後も本雑誌を何卒よろしく願い申し上げます。

2023年4月1日
編集委員会 副委員長
野村 卓生（関西医科大学）